

「昭和 100 年」関連施策実地レポート

このコーナーでは、内閣官房「昭和 100 年」関連施策推進室の室員が、各地で開催されている関連施策を訪問し、感想を含め皆様へご紹介します。

今回の訪問先は、長崎県長崎市にある長崎市歴史民俗資料館で開催された企画展「戦争と暮らし展」です。

企画展「戦争と暮らし展」

URL：<https://www.city.nagasaki.lg.jp/page/2480.html>

また、長崎市歴史民俗資料館のすぐ近くには、長崎原爆資料館と国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館があります。この 2 つの施設は、昭和という激動の時代を振り返り、被爆都市・長崎が歩んできた歴史の重みを考える上で極めて重要な施設であり、今回の企画展のテーマとも密接に関連することから、併せて訪問させていただきました。本レポートでは、長崎市歴史民俗資料館の「戦争と暮らし展」を中心に、隣接する両施設についてもご紹介いたします。

I 長崎市歴史民俗資料館「戦争と暮らし展」

長崎市歴史民俗資料館では、「昭和 100 年」の節目に合わせ、令和 8 年（2026 年）6 月 16 日から 8 月 30 日まで企画展「戦争と暮らし展」が開催されました。

昭和の初期、長崎では、その独自の地勢や豊かな国際交流の歴史を背景に、日本を代表する一大観光都市を目指したまちづくりが進められ、海外とも結びついて華やかな活気に満ちていました。しかし、昭和 12 年（1937 年）の日中戦争開始以降は、戦争が長期化・激化するにつれて街の情景は一変し、人々は厳しい戦時体制下での生活を余儀なくされました。本展は、戦時下に入る前から長崎が置かれていた状況を踏まえた上で、戦時下で激変した「暮らし」の諸相に焦点を当て、当時の実物資料から平和の尊さを再考する企画展です。



◆長崎市企画展「戦争と暮らし展」／長崎原爆資料館／国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

会場では、戦時下の厳しい統制と人々の暮らしを物語る数々の資料が展示されていました。

長崎では重要な造船所を抱えていたため、明治時代に長崎要塞が築かれ、要塞地帯法により周辺区域内での測量、模写、撮影等が厳しく制限されていました。区域内での撮影には事前許可が必要とされ、軍事施設はもちろん、防御上重要な地形が写る写真は背景の切り取りを命じられたため、撮影者は背景の映り込みやアングルに細心の工夫を強いられました。展示されていた当時の「撮影許可証」や、背景の一部が削り取られた写真からは、日常生活の隅々にまで及んでいた統制下の空気が鮮明に伝わってきます。

また、物資不足への対応として佐賀県の有田町などで製造された磁器製の「防衛食容器」（非常用缶詰の代用品）も展示されていました。これは、陶器でありながら真空密閉を可能にした特許製品であり、当時の技術と知恵の結晶に驚かされる一方で、最終的には中に入れる食料自体が枯渇して生産中止に追い込まれたという事実に、戦時中の過酷さを感じました。さらに、昭和 16 年（1941 年）の生活必需物資統制令の下、日常生活品や食料は配給制に、衣料品は点数切符制になりました。背広 30 点、シャツ 5 点など点数制限が課された「衣料切符」の展示からは、日々の衣食に事欠いた当時の窮迫した生活実態が直接胸に迫ってきました。

展示の中でひときわ目を引いたのが、出征する兵士へ贈られた日章旗等への寄せ書きや千人針です。家族や友人、職場の仲間たち等が武運長久と無事を祈り、白い晒し布に赤い糸で女性たちが一针ずつ結び玉を縫い込んだ千人針や、余白を埋め尽くす熱いメッセージが記された日章旗からは、大切な人を戦場へ送り出す人々の切なる祈りが痛いほど伝わってきました。この日章旗等の展示は、今回の企画展において展示点数を大幅に増やしたとのことでした。



職員の方にお話を伺ったところ、隣接する原爆資料館の来館に合わせて立ち寄りの方が多く、高齢者から若い世代まで幅広い年代の方、さらには外国人の姿も多く見られるとのことでした。また、会場内では、家族連れの親御さんがお子さんに展示品を見せながら当時の生活を丁寧に解説する姿も多く見られるそうです。

また、「戦争を体験した世代が減少し、話を聞くだけでは実感が湧きにくい世代が増えているからこそ、残された実物の『モノ』を直接見ることで、当時の過酷な状況を現実のこととして受け止めてほしい」と語っていただきました。そして、「今年は昭和元年から数えて満 100 年となる節目の年ですが、もし次の 100 年後に私たちの世代の暮らしを振り返る展示が行われるとすれば、そこに戦争に関するものが並ばない、平和な未来であってほしいです」と願いを託されていたのが非常に印象的でした。

◆長崎市企画展「戦争と暮らし展」／長崎原爆資料館／国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

なお、本企画展は8月30日で終了しますが、長崎市歴史民俗資料館では、「なつかしの昭和30年代資料展示コーナー」や「暮らしの道具展示コーナー」など、昭和を感じることができる展示コーナーが常設され、昭和という時代を身近に感じることができる施設となっています。



II 長崎原爆資料館

長崎市歴史民俗資料館に隣接する長崎原爆資料館は、被爆50周年記念事業の一環として、平成8年（1996年）4月に開館した施設です。昭和20年（1945年）8月9日午前11時2分、長崎市上空で炸裂した一発の原子爆弾によって、街は一瞬にして廃墟と化し、多くの人々の命が奪われ、生き残った人々も心と体に大きな痛手を受け、多くの被爆者が今なお苦しんでいます。この資料館は、長崎の惨状を今に伝えるとともに、原爆投下に至る経過や核兵器のない平和な世界への希求を体系的に伝えています。館内の常設展示室では、11時2分を指して止まった柱時計をはじめ、被爆した浦上天主堂の側壁の再現造形、熱線によって炭化した女子学生の弁当箱、高温で溶け合って固まったガラス瓶など、数多くの被災資料が展示されており、その圧倒的な破壊力と無差別の殺傷性に深く胸を抉られます。原爆の被害については、熱線によるもの、爆風によるもの、放射線によるものに分けて、詳しく解説されています。視察当日は平日でありながら、老若男女問わず国内外から非常に多くの来館者が訪れており、特に熱心に展示に見入る多くの外国人観光客の姿が強く印象に残りました。

なお、本館の常設展示は令和8年（2026年）9月以降、段階的なリニューアルが進められる予定とのことであり、時代に合わせて平和のメッセージをいかに効果的に継承していくか、不断に工夫を凝らし続ける真摯な姿勢が素晴らしいと感じました。



◆長崎市企画展「戦争と暮らし展」／長崎原爆資料館／国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

また、本館では開館 30 周年特別展として、長崎原爆資料館の軌跡を紹介する「閃きのあと」が同時開催されていました。(令和 8 年 (2026 年) 8 月 31 日をもって終了)

本展は、昭和 24 年 (1949 年) に発足した「長崎市原爆資料保存委員会」による被爆瓦や生活用品の収集活動、同年開館した木造六角形の旧資料館、昭和 30 年 (1955 年) に開館した長崎国際文化会館、そして現在の原爆資料館に至るまでの、77 年間にわたる資料収集と継承の歩みを振り返るものです。復興が進む街の中で、被爆の証拠が消えゆく危機感から市民と行政が手を取り合って資料を集め、今日まで受け継いできた軌跡が丁寧に紹介されていました。原爆資料館の歴史そのものが、平和を希求する長崎市民のたゆまぬ努力の結晶であることを痛感させられる重厚な展示でした。

職員の方からは、「平和な世界がこれからも続いていくよう、国内外の一人でも多くの方々に、原爆がもたらす影響と戦争の悲惨さについて正しく知っていただきたいです」との切実な想いを伺いました。



III 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

長崎市歴史民俗資料館と原爆資料館と同じエリアに隣接する国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館についても訪問しました。

同施設は、被爆資料の展示等を通じて悲惨な実相を伝えることに力点が置かれた原爆資料館とは趣を異にし、原爆により亡くなられた方々を追悼し、被爆者の想いや平和への祈りを静かに感じてもらうことに力点が置かれた施設となっています。

地上部に広がる「祈りの水盤」は建築全体のシンボルであり、水を求めて亡くなられた犠牲者への追悼を捧げる厳粛な空間となっています。水盤の底には約 7 万個の光ファイバーが埋め込まれており、夜間になると、昭和 20 年 (1945 年) 12 月末までに亡くなられたと推計される犠牲者の数 (約 7 万人) と同じ数の追悼の灯火が幻想的に浮かび上がるとのことです。



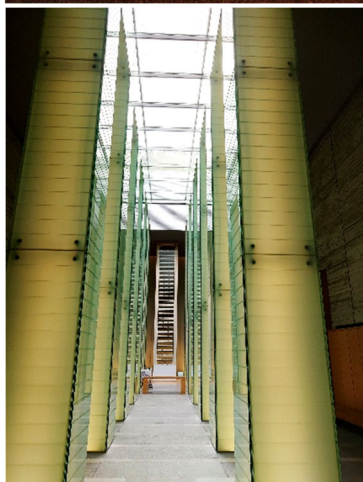
◆長崎市企画展「戦争と暮らし展」／長崎原爆資料館／国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

館内は、手記展示コーナーや遺影・手記閲覧室、平和情報コーナー、そして追悼空間などテーマに応じた空間で構成されています。屋外だけでなく、館内のあちこちにも水辺空間が設けられているのがとても印象的でした。

特に心を揺さぶられたのが、通称「黒本」と呼ばれる被爆体験記の集積です。被爆50年の機会に行われた被爆者の実態調査の際に寄稿していただいたもので、被爆60年、70年の実態調査の際の体験記を合わせると、館内には10万人分以上におよぶ被爆者等の手記・体験記が収蔵されており、手に取って閲覧することができます。何冊か手にとってページをめくらせていただきましたが、文字として刻まれた生々しい被爆の瞬間やその後の過酷な状況の記録に、感情がこみ上げてきました。

水盤の真下に位置する追悼空間は、張り詰めた静寂と深い祈りに満ちた厳粛な空間であり、こちらも非常に印象に残りました。前室には原爆で亡くなられた方々のご遺影が8面モニターに映し出され、追悼空間に入る前に心を落ち着けていただけるようになっており、追悼空間に入ると、12本のガラスの光柱が立ち並び、その先が原爆落下中心地を向くよう緻密に設計されています。奥の名簿棚には、令和8年（2026年）8月9日現在で204,708名が登載された長崎原爆死没者名簿が納められており、ガラス柱の穏やかな光は、未来への平和の祈りが世界中の空へと伸びていく姿を象徴しています。

また、この追悼空間では、天窓の外にあるガラス柱がプリズムの役割を果たすことで、毎年10月と2月の限られた気象条件が揃った時にのみ「追悼空間の虹」と呼ばれる美しい虹色の光が現れ、祈りの場をいっそう神秘的に包み込む姿が見られるとのことでした。



◆長崎市企画展「戦争と暮らし展」／長崎原爆資料館／国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

本館では、被爆の実相を後代や世界へ語り継ぐため、被爆者の体験を家族や伝承者が語り継ぐ被爆体験伝承者等の派遣事業や、聞き取りによる体験記の執筆補助、毎年海外で開催する海外原爆展（今年度はマレーシアで開催予定）など、記憶の風化に抗うための多彩な取組を精力的に展開しています。

職員の方にお話を伺ったところ、「原爆資料館に比べると知名度はまだ高くありませんが、一度足を運んでいただければ、建物の佇まいや空間演出を通して施設の持つ深い意義を必ず感じていただけます。『今まで知らなかったが、訪れて本当に良かった』と涙ぐまれる来館者の方も多くいらっしゃいます」とお話ししてくださいました。そして、「長崎に原爆が投下されてから 80 年余りが経過しましたが、被爆者や長崎市民にとっては苦難と復興の非常に長い年月でした。『昭和 100 年』という節目にあらためてこれまでの歩みに想いを馳せるとともに、次の 100 年が絶対に平和な時代であり続けるよう、これからも祈りと継承の灯を絶やさずにいたいです」と、静かに、けれども力強く語ってくださいました。

今回の訪問は、先の大戦における長崎の状況や苦難の歴史について、多角的な視点から深く学ばせていただく極めて貴重な機会となりました。原子爆弾投下による計り知れない犠牲と苦痛についてはもちろんのこと、それ以前の要塞地帯としての厳しい統制や、物資不足のなかで懸命に日々を生き抜いた人々の戦時下の暮らしについても理解を深めることができ、長崎という街が背負ってきた昭和の歴史の重さを改めて認識した次第です。

現在の長崎市は、世界中から多くの人々が訪れる日本有数の国際観光都市として発展を遂げています。「昭和 100 年」という大きな節目を迎えた今、この街が焦土から歩んできた復興の軌跡と、「長崎を最後の被爆地に」と願い、訴え続ける人々のたゆまぬ継承活動に心を打たれます。ぜひ一人でも多くの方に実際に長崎の地へ足を運んでいただき、そこに刻まれた歴史の息遣いと、平和を祈り続ける人々の想いを直接肌で感じていただければ幸いです。



◆長崎市企画展「戦争と暮らし展」／長崎原爆資料館／国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

【長崎市歴史民俗資料館「戦争と暮らし展」】

会期：令和8年6月16日（火）から8月30日（日）

主催：長崎市

住所：長崎県長崎市平野町7-8（長崎市平和会館 地下1階）

【長崎原爆資料館】

住所：長崎県長崎市平野町7-8

【国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館】

住所：長崎県長崎市平野町7-8